

佐野朋子は死なない 菅原百合絵

『歌壇』五月号に久永草太が寄せた時評「何を言っても許されるのか」を興味深く読んだ。久永は『歌壇』二月号に掲載された高島裕の連作から数首を引き、その作品が孕む「倫理的な問題」を指摘している。引かれてる歌はこのようなものだ。

・国連を味方につけて強気なり、性と婚姻の紊乱者ども

「アイデンティティ」

直截な主義主張、というよりほとんどプロパガンダといつてもよいこれらの歌に、久永は「とても怖い」という感想を表明したうえで、歌と倫理の問題を真摯に論じている。短歌であれば何を言っても許されるのか？ という自ら立てた問いに対する久永の答えは冷静かつ誠実だ。憲法上の表現・思想の自由の不可侵を確認しつつも、読者としては自分の反応を尊重してよい、闘争しても逃走してもよいと彼は述べる。さらに、こうした作品を文学として鑑賞すべきではないと彼は主張する。「倫理の話をするとき我々は、やつらを文学の土俵から引きずりおろして対話しなければならぬ」のだと。

時評子としては、久永が引用した高島の歌に表れている主張はまったく共感できるものではなく、さらに「性と婚姻の紊乱者ども」というような強い表現に恐怖を感じる人がいるのも理解できる。少なくともこの主張は「包括的」ではない。

そのうえで興味深く思われるのは、歌を文学的に読解することを拒否する久永の姿勢それ自体だ。ここでは、高島の歌は高島本人の主張だと自明的に見做された上で「文学の土俵から引きずりおろ」されて純粋に倫理的な議論の俎上に乗せられている。時評子はそれに異論を挟むつもりはない。高島の歌はそうとしか読めないからだ。著者と歌はベタに一体化しているとしか解せない。久永も当然その前提につて歌を倫理的に評しているのだ。そしてまさにこのことが時評子には、短歌という詩型の特異性をあらわにしているように思われる。どれほど私小説性の強いものであれ、小説などの文芸ではこうした主張へのベタな一体化はない。語りのなかでプロパガンダは何らかのメタな操作を加えられざるをえないからだ。主張だけ書かれた文章は小説になりえない。だが、短歌は主張を文芸にしてしまう。のみならず韻律の力でプロパガンダは強化される。太平洋戦争中の国粹主義的な歌は我々にそのことを雄弁に示した。

久永の評が示すのは、そうした歌が歌イコール作者の「ベタな地平」に評する者をも構造的に誘い込むことであろう。
・佐野朋子のほかころしたると思ひつつ教室へ行きしが佐野朋子
をらず
小池光『日々の思い出』

小池光のこの歌に、教師がこのような言葉を使うのはよくない、と批判が寄せられたことはよく知られている。これもメタなき「ベタな地平」の読みである。久永の評を一読して抱いたのは、四十年近く経つても佐野朋子問題は色褪せず再帰してくるのだな、という感慨だった。短歌の私性のなせる業である。